

巖谷小波の俳句―「句会」仕立てで―

講師 坪内稔典先生(俳人、京都教育大学名誉教授)

聞き手 宮川健郎(大阪国際児童文学振興財団理事、武蔵野大学名誉教授)

巖谷小波は、俳人でもありました。

明治 20 年代、言文一致体の小説とはまた別の可能性をもとめて、幸田露伴や尾崎紅葉らは、井原西鶴の浮世草子を見直し研究しました。これは、紅葉らの文学グループ「硯友社」のメンバーが俳句に夢中になるきっかけにもなります。西鶴は、談林派の俳諧師でもあったのです。紅葉は、鋭い観察と短いけれども力のある表現によって成り立つ俳句は小説の勉強にもなると考えて、1890(明治 23)年には、俳句の結社「むらさき吟社」も創設します。「硯友社」同人だった巖谷小波は、「むらさき吟社」にも加わりました。さらに、正岡子規らの「日本派」(子規は新聞『日本』の俳句欄の選者でした)などと並ぶ俳句の新派である「秋声会」(1895 年創立)にも、紅葉とともに参加します。

巖谷小波は、生涯にわたって、たくさんの俳句をつくりましたが、句集『さゝら波』(1932 年)などから、100 を選んでみました。小波が送った絵葉書に書き記された句もあります。関西例会に参加される方は、あらかじめ 100 句を読んで、気に入った三つを選んでください。

当日は、100 の俳句を披講したあと(あらためて読み上げて披露します)、みなさんそれぞれが 3 句選んだ、その句に点を入れていただきます。これは挙手でいきますから、3 回手をあげてください。100 のうち、どの句に点が集まるでしょうか。高点句から、少しずつ検討していきます。挙手で点を入れた句については、どうして選んだのか、感想もお聞きします。100 はみな小波の俳句ですけれども、これは、一種の「句会」です。宗匠としてお迎えする俳人の坪内稔典先生のお話もうかがいながら進めます。

「句会」仕立てで小波の俳句を読みながら、その特質にせまることができたらと思います。小波の御伽噺やその口演とのつながりも見出すことができるでしょうか。(宮川健郎)